



Data

監督・原案・脚本：シドニー・シビリア

出演：エドアルド・レオ／ルイジ・ロ・カーショ／ステファノ・フレイジ／グレッタ・スカラーノ／ヴァレリア・ソラリーノ／パオロ・カラブレイジ／リベロ・デ・リエッツォ／ヴァレリオ・アブレア／ロレンツォ・ラヴィア／ピエトロ・セルモンティ

👁️👁️ みどころ

昔のイタリア映画は、マルチェロ・マストロヤンニやソフィア・ローレンでもっていた（？）が、今は？フランス映画ではアラン・ドロンやジャンヌ・モロー以降もそれなりの面白さを引き継いでいるが、イタリア映画は少し影が薄い・・・？

そう思っていたが、優秀な研究者たちの頭脳の海外流出問題に焦点を当てたオリジナル脚本による第1作は大ヒット！シリーズ化された第2作では、ドラッグ製造からドラッグ撲滅に180度「任務」を変えたが、それは一体なぜ？その見返りは？

奇想天外な列車アクションを含む映像テクニクを楽しみながら、「10人の怒れる教授たち」の行動とその心理にしっかり注目。さらに、第2作と第3作を同時に撮影するという合理的システムにも注目しながら、第3作に期待！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 「7人の危ない教授たち」とは？その大ヒットはなぜ？ ■□■

かつてのイタリア映画といえば、フランス映画のアラン・ドロンやジャンヌ・モローに対して、マルチェロ・マストロヤンニやソフィア・ローレン等が有名だった。また、イタリア・フランス映画ながら、ジュゼッペ・トルナトーレ監督の『ニュー・シネマ・パラダイス』(89年)はすばらしい名作だった(『シネマ13』340頁)。しかし、近時フランス映画はまだしも、イタリア映画の名作はあまり聞かなくなった・・・？そう思っていたが、1981年生まれの手若手監督シドニー・シビリアの長編デビュー作『いつだってやめられる7人の危ない教授たち』(14年)は「イタリア映画祭2015」で上映されて大ヒットした

そうだが、それはなぜ？

『十二人の怒れる男』(57年)の十二人はアメリカの陪審員の数のこと。また、スティーブン・ソダーバーグ監督の『オーシャンズ11、12、13』(『シネマ1』32頁、『シネマ7』140頁、『シネマ15』28頁)のオーシャンズは史上最強の犯罪ドリームチームの名前のこと。しかして、「7人の危ない教授たち」とは一体ナニ？2009年にギリシャで始まった「欧州危機」はイタリアにも拡大し、大学の研究費削減などによって多くの研究者たちの収入がカットされ、職を追われる者も出る中、「国の頭脳流出」と言われる研究者の海外転出が相次ぐ時代になった。シドニー・シビリア監督は自ら書いたオリジナル脚本でそんな人たちに注目し、そうした学究の道に進めなかった研究者たちが、その才能を思いがけない方向で生かすという「痛々な風刺コメディ」として第1作の製作に着手。高学歴で優秀な頭脳を持っているのに、その能力に見合った職を得ることができない7人の教授たちは、犯罪に手を染めるという危ない決心をし、純度の高いドラッグを製造することによって巨額の富を手に入れた。そんなストーリーの第1作は、予想外(?)の大ヒット!なるほど、なるほど!

■□シリーズ化が決定! そのタイトルは? ■□

その結果、今の時代、2匹目のどじょうを狙って『いつだってやめられる』のシリーズ化が決まり、その第2作の完成となったわけだ。第2作目のタイトルは『いつだってやめられる 10人の怒れる教授たち』。つまり、「いつだってやめられる」は同じだが、教授の数が7人から10人に増えているうえ、第1作で7人の教授たちのリーダーになった神経生物学者のピエトロ・ズィンニ(エドアルド・レオ)はドラッグ製造に乗り出す「危ない教授」だったが、第2作目の本作では彼は「怒れる教授」になるらしい。彼らは一体何に怒っているの?

私は4月25日に山田洋次監督の新シリーズ『家族はつらいよ』の「パートⅢ」となる『妻は薔薇のように』を観たが、そのテーマは「主婦への賛歌」。第1作は「熟年離婚」、第2作は「無縁社会」だった。なるほど、なるほど……。シリーズ化がいつどのように決まるのかはいろいろだが、全49作と世界一の長期シリーズになった『男はつらいよ』シリーズも、『釣りバカ』シリーズも1作が完成すれば、次作のテーマは……。?と次の企画が開始するはずだ。

ところが、シドニー・シビリア監督が『いつだってやめられる』シリーズの第2作を企画するについてはそのテーマを「怒れる教授たち」に設定したが、同時に第3作の企画とそのテーマも設定し、第3作へと続く形で第2作の撮影を始めたらしい。なるほど、そりゃ合理的だ。そのため、本作では10人の教授たちがなぜ怒り、その結果どんな行動に至ったのかをしっかりと確認するとともに、本作ラストには第3作への「橋渡し」のシーンも登場するので、それにも注目したい。

■□■怒れる教授たちの任務はスマートドラッグの撲滅！■□■

シリーズ第2作にあたる本作は、刑務所に服役中の主人公ズィンニが妊娠中の妻（ヴァレリア・ソラリーノ）と面会するシーンから始まる。続いて、計算化学者で太っちょ男のアルベルト・ペトレリ（ステファノ・フレイジ）が運転する車が横転するあつと驚くシーンが登場する。したがって、私たち観客は、その人物設定やストーリーの脈絡が最初は全くわからないが、そこからストーリーが遡っていく中で、なるほど、このような形で「7人の教授たち」がドラッグ製造に従事する「危ない教授たち」になり、その結果として今、ズィンニが服役しているのだということがわかってくる。

他方、美人の女警部パオラ・コレッティ（グレッタ・スカラーノ）がズィンニに対して、釈放と引き換えに30種類のスマートドラッグ撲滅のミッションを依頼するところから、第2作の本格的ストーリーが始まっていく。すなわち、第2作における10人の怒れる教授たちの任務は第1作とは正反対に、スマートドラッグの撲滅になるわけだ。ズィンニの呼びかけで集まったのは、第1作でドラッグ製造に従事した7名の教授の他3名を加えて計10名。その紹介は省略するが、これはズィンニがコレッティ警部と共に海外に潜む優秀な研究者たちをリクルートした結果だ。

第2作におけるこの新たな任務を達成すれば、ズィンニは刑務所から出所できるうえ、教授たち全員の犯罪歴が抹消されるという約束だから、10人の教授たちは全員意気込んでその任務に臨むことに。そして、教授たちの努力によってこのミッションは次々と達成されたが、大物の“ソポックス”だけには容易にたどりつけなかったから、コレッティ警部はイライラ。さらに、警察では記者会見でスマートドラッグ減少に伴う捜査手法について疑問の声が上がった上、コレッティ警部は上司からさかんにツッコミを入れられたため、そのイライラはさらに助長していくことに。さあ、10人の教授たちの任務の達成は……？

■□■一方的な条件の変更は如何なもの？■□■

本作中盤では、10人の教授たちの個性的なキャラを楽しみながらその任務の遂行ぶりに注目したい。第1作と第2作の共通のテーマは「不遇な高学歴エリート中年の逆襲」だが、第1作でも7人の危ない教授たちは逆襲を立派に果たしたし、第2作でも10人の怒れる教授たちは新たな任務をしっかりと果たしたのはさすがだ。

その結果、今日は10人の教授たちが羽目を外して任務達成を祝うパーティの日だが、何とその席に登場したコレッティ警部は、独断で31番目のスマートドラッグである“ソポックス”の解明が釈放の条件だと宣言したから、ズィンニたちはビックリ。10人の教授たちに比べて、警察が優越的な位置にあるとはいえ、いくらなんでもこんな一方的な条件変更は如何なもの？当然ズィンニ達はそう抗議したが、コレッティ警部はあくまで強硬だ。

そんな中、ズィンニが最も信頼しているアルベルトが“ある無謀な実験(？)”を執行したことによって“ソボックス”に必要な成分が避妊薬のピルから抽出できることに気づいたため、再び力を合わせて“ソボックス”の解明に乗り出すが、そこで新たな敵ヴァルテル・メルクリオ(ルイジ・ロ・カーショ)が登場してくることに。

■ピル強奪の「列車アクション」に注目！■

後半から突如登場するヴァルテル・メルクリオ役を演ずるルイジ・ロ・カーショは、イタリア映画界を代表する俳優らしい。そして、プレスシートによれば、彼は脚本を読まずに出演を快諾し、従来のイメージを覆すコメディタッチの悪役を軽快に演じたそうだ。

ソボックスに必要な成分をピルから抽出できることを知ったズィンニとアルベルトが、大量のピルの取引に目をつけたのは当然。また、大量のピルが配送される場所が“ソボックス”の製造工場に違いないと狙いをつけたのも当然だ。しかして、本作後半には大量のピルを載せて移動する列車を舞台として、ピルの強奪をめぐる「列車アクション」が華々しく展開されるので、それに注目！もっとも、『レイルロード・タイガー』(16年)、『シネマ40』172頁)におけるジャッキー・チェンの列車アクションは涙なしには見られない愛国心あふれるものだったが(?)が、本作のそれは迫力満点ながらユーモアもいっぱいなので、大いに笑いながらその列車アクションを楽しみたい。

しかして、ズィンニたちは“ソボックス”の製造工場に潜入することに成功し、最後の困難なミッションを達成。しかも、ズィンニは、ジュリアの出産にも少し遅れながら何とか駆け込むことができたから、すべては万々歳。一瞬そう思えたが……。

■こんな違法捜査がOK?いやいや……■

日本ではセクハラ、パワハラ問題が花盛りだが、警察による違法捜査問題も常に社会問題になっている。そんな私の感覚からすると、本作におけるコレッティ警部とズィンニとの「密約」、すなわち30種類のドラッグ撲滅に成功すれば、ズィンニたちの犯罪履歴を抹消するという約束は明らかに違法捜査だ。本作中盤以降は1人の女性記者からしつこくそれを追及されるが、コレッティ警部はあくまでそれを無視。しかし、本作ラストに向かってド派手な列車アクションまで起きて社会的注目が集まると、ズィンニたちの行動が目立ち、コレッティ警部も「内部査察」を受けなければならない羽目に。そんなコレッティ警部の立場をしっかりと守ってくれる上司がいればいいのだが、上司もいい加減?さて、イタリア警察の内部事情は?

ズィンニたち10人の怒れる教授たちとコレッティ警部の密約はどこまで有効なの?一時は一方的にコレッティ警部の都合によって契約内容が変更されたこともあるくらいだから、その効力はもともと微妙。そのうえ、当のコレッティ警部が転んでしまうと、そもそも密約自体がパーになってしまうのでは……?もし、そうなれば、30種類のドラッグ

のみならず、31番目のドラッグである“ソボックス”の撲滅まで頭脳の限り、身体の利用を使って成功させながら、ズインニたちの釈放はなくなってしまうの？そんなバカな・・・？ズインニたちはそう訴えたが、密約の当事者であるコレッティ警部が逮捕されてしまうと、ズインニたちの訴えはそもそも無意味に……。さあ、そんな中ズインニたちの怒りは頂点に達したが……。

第1作と第2作の統一テーマは、「不遇な高学歴エリート中年の逆襲」。しかし、第2作は第1作と違って、ズインニたちのチームはコレッティ警部と契約を結び、協力して30種類のスマートドラッグ撲滅のミッションを完遂したのだから、決して怒らなくてもいいはずだ。しかるに、第2作にそんなサブタイトルをつけた理由は、第2作のラストで明らかにされるので、それに注目！なるほど、なるほど、すると第3作の展開は……？

2018（平成30）年5月8日記